トピック

満足度の構成要素についての考察

―年齢・性別・人口規模別の観点から―

政策統括官（経済社会システム担当）付
参事官（総括担当）付
堀内 祐汰

はじめに

本稿では、内閣府が本年7月に公表した「満足度・生活の質を表す指標群（ダッシュボード）」の試案の検討にあたって実施した「満足度・生活の質に関する調査」について、その概要と得られた示唆の一部を紹介したい。

調査結果の概要

調査では、回答者に対し、現在の生活に関する総合的な満足度（以下、「総合主観満足度」という。）及び合計13分野の生活分野別の主観的満足度（以下、「分野別満足度」という。）について、「非常に満足している」を10点、「全く満足していない」を0点として選択させた。まず、総合主観満足度の集計結果についてみると、①全体の平均は5.89点、②女性の方が満足度は高い、③年齢別では「谷型」（45歳～59歳が最も低く、60歳以降で最も高くなる）、④世帯年収・資産別では「山型」（年収は2000万円～3000万円で、資産は1億円～3億円で満足度は頭打ち、それ以上では低下する）、⑤健康状態がよいほど満足度が高く、また、「よい」と「よくない」で大きな差が生じること、⑥頼りになる人の数やボランティア活動の頻度等（ソーシャル・キャピタル）が増加するほど満足度が高いこと、⑦趣味や生きがいの有無で満足度の差が大きいこと、などが確認された。

性別・年齢階層別に見た総合主観満足度と分野別満足度の関係

次に、総合主観満足度と分野別満足度について、性別及び年齢階層別の相関関係を調べることで、満足度を介した経済社会の構造について分析した。総合主観満足度と13の分野別満足度との関係について、総合主観満足度を被説明変数、13分野の満足度を説明変数とする重回帰分析を行った結果が図表1である。まず全体についてみると、補正R2（＝自由度修正済み決定係数）が0.628であり、有意（白色）となっている9分野で全体の総合主観満足度の62.8%が説明されていることが分かる。次に、男女別にみると、「雇用と賃金」、「安全」は、男性のみ有意である一方、女性は男性と比べ、「家計と資産」、「健康」の偏回帰係数が高くなっている。

さらに、総合主観満足度のうち、本モデルにおいて説明できている部分を、有意となった分野の偏回帰係数の大きさで案分することにより、総合主観満足度の分野別の構成比を確認することとした（図表2）。説明できていない37.2%は、有意である9分野以外のそ

図表１　属性別の重回帰分析の結果（性別・年齢別）

	総合満足度	観測数	補正R2	家計資産	雇用賃金	住宅	WLB	健康	教育	社会とのつながり	三権	自然	安全	子育て	介護	楽しさ面白さ(純)
全体	5.89	10293	0.628	0.284	0.046	0.093	0.216	0.142	0.055	0.135	−0.046	0.005	0.035	0.018	−0.022	0.385
男	5.67	5102	0.634	0.256	0.094	0.085	0.219	0.133	0.063	0.134	−0.029	−0.007	0.043	0.028	−0.036	0.367
女	5.90	5191	0.624	0.306	0.009	0.101	0.211	0.149	0.050	0.126	−0.069	0.022	0.031	0.009	−0.005	0.394
男15～24才	5.79	899	0.570	0.080	0.204	−0.032	0.253	0.108	0.161	0.151	0.030	−0.004	−0.032	0.016	−0.032	0.334
男25～34才	5.46	920	0.603	0.297	0.100	0.019	0.167	0.197	0.067	0.130	−0.041	0.034	0.013	0.052	−0.030	0.327
男35～44才	5.33	981	0.627	0.199	0.143	0.149	0.112	0.112	0.077	0.165	−0.043	−0.054	0.038	0.081	0.014	0.355
男45～59才	5.30	1064	0.705	0.325	0.036	0.126	0.272	0.102	0.043	0.111	−0.038	−0.002	0.102	0.059	−0.115	0.346
男60～89才	6.30	1238	0.640	0.327	0.036	0.103	0.268	0.146	−0.034	0.086	−0.017	−0.004	0.088	−0.082	0.016	0.443
女15～24才	5.91	893	0.518	0.197	0.026	0.069	0.135	0.202	0.151	0.072	−0.032	−0.002	0.003	0.029	−0.006	0.344
女25～34才	5.86	917	0.621	0.301	0.001	0.043	0.264	0.176	0.071	0.102	−0.106	0.000	0.053	0.027	−0.010	0.357
女35～44才	5.62	978	0.595	0.261	0.050	0.120	0.155	0.135	0.043	0.213	−0.050	0.023	−0.022	0.015	0.060	0.332
女45～59才	5.51	1064	0.677	0.379	0.033	0.141	0.222	0.126	−0.017	0.113	−0.082	0.060	0.041	−0.004	−0.056	0.467
女60～89才	6.42	1339	0.659	0.322	−0.014	0.118	0.225	0.124	0.025	0.135	−0.081	0.038	0.078	−0.009	−0.030	0.434

（備考）①総合主観満足度の全国平均は、単純集計結果ではなく、平成27年国勢調査の構成比（性別・年齢・地域）で調整（ウエイトバック集計）を行っている。
②強制投入法による重回帰分析結果、数値は偏回帰係数
③表の配色は、白色：|t値|≧2.0、緑色：1.5≦|t値|＜2.0、灰色：|t値|＜1.5又は符号条件が合致しないもの
④「楽しさ・面白さ（純）」は、「楽しさ・面白さ」の分野別主観満足度を他の12の分野別満足度で重回帰した際の残差

の他の要因であり、ここには、家族との関係などの個人的な要因も含まれると考えられる。

同様に、男女別にみると、性別により構成比に大きな違いはないものの、女性の方が「家計と資産」、「楽しさ」の占める割合が高いことがわかる。

また、図表1を性別・年齢階層別にみると、①「住宅」は、女性はほぼすべての世代で有意になるものの、男性は35歳以上で有意となる、②「教育」は若年で有意となるものの45歳以降は有意とならない、③「子育てのしやすさ」は、男性の35～44歳のみで有意となる、④「身の回りの安全」は、男性は45歳以上、女性は60歳以上と比較的高い年齢層で有意となること等がわかる。

人口規模別に見た総合主観満足度と分野別満足度の関係

図表3は、回答者の属性を所属する市町村の人口規模別に分類し、特別区と人口100万人以上（1,571人）、人口20万人以上50万人未満（2,835人）、人口5万人未満（1,593人）について、総合主観満足度の分野別の構成比を示したものである。主な特徴としては、①20万人以上50万人以上の地域でのみ「身の回りの安全」が有意になること、②「家計と資産」については、人口規模が小さくなるにつれて構成割合が大きくなること、③反対に人口規模が小さくなるにつれて「雇用と賃金」の構成割割合は小さくなり、5万人未満の市町村では有意ではなくなること、などが示されている。

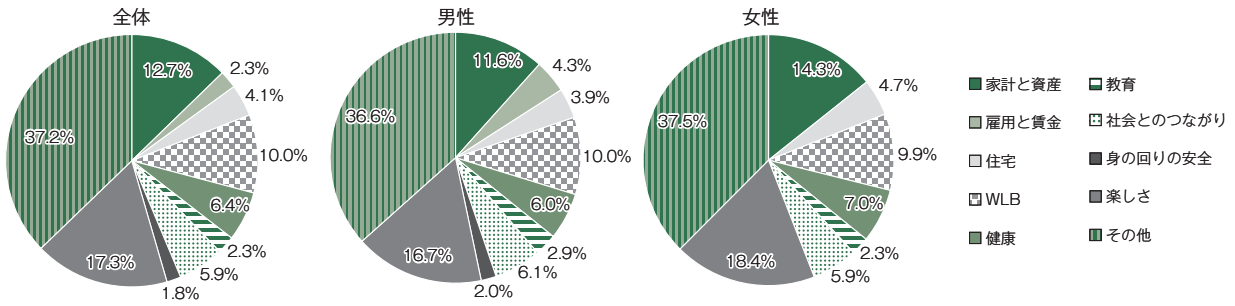
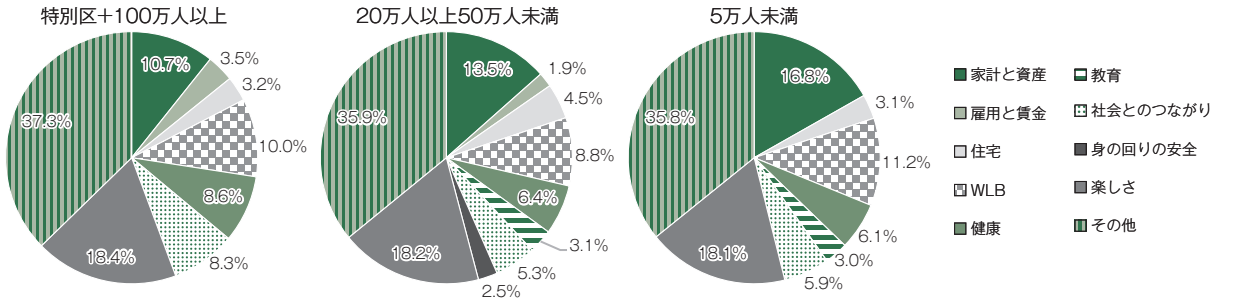
終わりに～今後の方向性について～

今回の調査では、我が国全体の満足度を調査するために、都道府県ごとに均等割付及び人口比に応じた割付を行った。結果として、サンプル数の不足により、都道府県ごとの重回帰分析は見送り、全体のサンプルを地域別、人口規模別等に分類した分析に留まった。今後、追加調査等を通じてサンプル数を増やし、都道府県ごとに総合主観満足度に対して有意となる分野や、その構成比を示すことができれば、満足度の観点から、各自治体が取り組むべき政策分野を示す指標になりうると考えている。

また、今回の調査結果を用いた重回帰分析では、決定係数が0.6から0.65程度のものが多かった。調査分野や質問項目を改善することにより、決定係数の上昇、即ち説明力の向上を図ることにより、満足度に影響を与える要因の深掘りをすることも今後の方向性の一つと考える。

堀内 祐汰（ほりうち ゆうた）

図表２　総合主観満足度の分野別の構成比（全体・性別）



図表３　総合主観満足度の分野別の構成比（人口規模別）